山梨県総合計画審議会第６回教育文化部会 会議録

１　日　時　　平成２２年８月２３日（月）　午前１０時～正午

２　場　所　　ホテル談露館「アンバー」

３　出席者

・　委　員（５０音順、敬称略）

秋山 由里　　跡部　和　　飯窪 さかえ　　池田 政子　　石田 敏枝
内松 太一　　岡部 和子　　上名 をさみ　　窪内 節子　　小宮山 英人
鶴田 一杳　　長谷川 由美　　深沢　修　　深澤 光江　　保坂 精治
堀内 直美

・　県　側

知事政策局長　　企画県民部理事　　教育長
（事務局：知事政策局）政策参事　　政策主幹

４　傍聴者等の数　３人

５　会議次第

（１）　開会
（２）　部会長あいさつ
（３）　知事政策局長あいさつ
（４）　議事
（５）　閉会

６　会議に付した議題（すべて公開）

（１）　平成21年度チャレンジ山梨行動計画の実施状況の概要について
（２）　答申素案について
（３）　その他

７　議事の概要

（１）　議題（１）～（２）について

議題（１）に関し、資料１により、議題（２）に関し、資料２により事務局から説明した後、次のとおり意見交換を行った。

（委員）

資料１の政策別事業費の執行状況の中にある執行率の出し方を教えていただきたい。

（政策参事）

事業費の執行率につきましては、計画額の中で平成 19 ～ 21 年度までの事業費の

割合となっている。進捗率で言えば 75 ％ぐらいが 3 年目とすれば、普通に進捗していると考える。

（委員）

資料１の数値目標の進捗状況の中の進捗率の出し方も教えていただきたい。

（政策参事）

「政策５　ミュージアム甲斐・ネットワーク会議参加博物館数」では、基準値の平成１８年度は７６館、目標値が１２０館ですので、その伸び率を基の７６館で割った数になっている。

「政策１　学校の自己評価結果を基に外部評価を実施した県立学校の割合」では、基準値の平成１８年度に外部評価を３５％実施していたが、目標が１００％ですので、その１００％に達する割合を３年で割りますとその進捗率が出るので、１００％から３５％を引いた６５％を４で割ったものが進捗率になるので、そのパーセンテージを足せばその割合になる。６５分の増加率ということになる。

目標が１００％ですので、政策１で言うと、基準値の平成１８年度は３５％ですので、６５％伸びれば１００％になる。例えばそれが５０％ですと１５％伸びるので、６５分の１５％が進捗率である。

（委員）

数値目標の算出方法を教えていただきたい。

（政策参事）

例えば、「政策１　学校の自己評価結果を基に外部評価を実施した県立学校の割合」では、自己評価に対する外部評価を実施した県立学校数になる。

また、資料のチャレンジ山梨行動計画（変更計画）の１６３ページに、数値目標の名称、説明、また算出方法というものを記載している。それぞれパーセンテージとか人数とかいろいろな数値があるが、基本的には現況から増加率をベースの基準値で割ったものが、増加率、進捗率である。

（委員）

それぞれの数値目標の尺度が違うので、算出の仕方も違うと思うが、基準値、目標値、現況値を例えば A、B、C としたときに、分母はＢマイナス A、分子は何と何を引くという、計算式はあるのか。

「政策５　県立文化施設（美術館、博物館、考古博物館、文学館）の入場者数」の進捗率１，０６５．８％がはどうやって出てきたのか。

（政策参事）

基準値の平成１８年度は、５６万８３９１人である。目標値は、この計画を作る際に、このくらいの入館者にしたいという目標として、５７万５０００人に設定した。

現況値の平成２１年度の入館者数が６３万８８３１人から、基準値である５６万８３９１人を引き、差額を出す。また、目標値の５７万５０００人から、同じく基準値

である５６万８３９１人を引き、差額を出す。最初に申し上げた現況値と基準値との差額を目標値と基準値との差額で割り、進捗率を出すと、１，０６５．８％が出る。

政策１～４につきましても、その目標値と基準値、それから現況値と基準値、それぞれの差額の割り算の結果を進捗率としている。

（委員）

今は、非常に多くのアジアの学生たちが山梨県に来ている関係上、中国語の授業とか韓国語の授業をしているが、山梨県の若い人たちは、あまり興味を持っていないと感じる。グローバル化といえば、英語という考え方が強いのかもしれない。また、若い人たちの内向きな志向というものが非常に気になっている。

クールジャパンというかたちで、日本のゲーム、漫画、アニメなどに興味を持っている外国の若い人が多いので、そこをきっかけにして、日本の若い人たちの社会などに対する意欲を引き出したり、山梨の未来について考えるきっかけづくりができたらと思う。また、先ほど言ったようにアジアの言語についての興味を持たせることが出来たらいいと思う。

現在、多くの中国人、韓国人が大学に来ているが、一度日本に来たらほとんどの人が母国に帰らないで、日本で就職したいと考えていて、実際に日本に就職している状況がある。

日本の若い人たちが、アジアの人たちのバイタリティーに負けてしまっているようなところがあるので、負けないように意欲を持たせるものができたらいいと思う。

（委員）

県がチャレンジ山梨梨行動計画というものを策定して、それを受けていくのは県民でり、各市町村である。また、教育という点からみれば、この総合計画審議会では、この教育文化部会が一番の基本になると思う。

当面は、国民文化祭の成功に向けて、県民総参加で取り組んでいかなければならないと思っている。

（委員）

各市町村の発展が、やがて山梨県の発展へと大きくつながっていくと思う。大型店が各地域に出て、各市町村の商店街というのは非常に疲弊し、経営も厳しくなっている。また、商店の後継者が居ないということが人口減少につながっていくのではないかと、大変危惧している。

峡南地域の旧増穂町、鰍沢町、六郷町、市川大門町を中心とした青年会議所というのがあるが、現在、地域の後継者がいない。商店を見ると、現在、鰍沢の場合は商店街の稼動率は大体４０％もない。増穂町では、２０％、３０％というような非常に寂しい状況である。これは南アルプス市にしても同じだと思う。いずれにせよ次から次と大型店が出るたびに町の後継者がいなくなってしまったという状況だ。

静岡市の駅前商店街というのは平日でも、大概人が居る。甲府と比べて、静岡にはあまり大型のショッピングセンターが無く、しかも造る場所も無いと聞く。だから静岡の駅前商店街も活気がある、ということを聞いた。

山梨県は、次々と大型店が出ているのだから、実に寂しいことだと思う。各市町村

の人口減少をどうして止めるのか、それにはまず商店街の活性化が必要なのではないか。

農業後継者についても不足しているので、都会の人たちにももう少し農業に目を向けてもらい、地域に居住する方向へ打ち出していただくことが望ましいと思う。

人口減少に対する施策を講じて欲しいと思っている。各市町村を中心として、地域に若者が定着する街づくりというものを考えてほしい。

（教育長）

後継者のことや、あるいは消費者といったことについて、教育という領域からはなかなか入り込めないが、個々の一人の子どもたちを大事にし、いかに育てるかということについては、量から質というところへの転換ということが非常に重要なことであると考えている。

また、様々な形を国レベルや、また県レベルで考えても、いわゆる空洞化のようなものが進むことを避けるために、現在「ふるさとを愛し、世界に通じる人づくり」ということで教育全般を推進しているが、指導要領が変わったところで、さらにこういう視点を強めながら教育活動を実践していきたいと思う。

（企画県民部理事）

国民文化祭開催に向けて、県民主体で総参加で向かうべきだという言葉を頂き感謝している。

国民文化祭は、７月に基本構想を国のほうで認めていただいた。県の実行委員会は、７月２７日に開催し、今後本格的に準備に入っていくという状況である。通年型なので、飯窪委員がおっしゃるように、県民が総参加でやっていかなければ、成功はないと思っている。

（委員）

キャリア教育について、現在の高校生は夏休みとは名ばかりで、部活動や夏休みの特別授業などに追われ非常に忙しい。このため、夏休みの職場体験が、部活動などの予定が入っていて日程が折り合わない。第一目標にはなかなか行けず、第二希望、第三希望のほうに回されている。すべての子どもたちが、夏休みに限らず幅広く長期間にわたって職場体験の機会が与えられればいいと思う。

地域産業と学校が連携することは、非常に大切なことだと思う。県教育委員会からも各産業に働き掛けをしていただければ、非常にありがたい。

また、今年の夏の美術館と文学館の共同特別展「くじらぐもからチックタックまで」のように、美術館や新県立図書館などには、子どもたちが行きたくなるような、そして大人も保護者も巻き込んで行くような、そういう運営をしていただきたい。

太陽光発電について、北杜市の方で各小学校に太陽光発電を設置する話を学校側から伺った。今は統廃合が進んでおり、何年後かには取り壊される校舎に太陽光発電を付けるという話があって、非常に無駄なことかなと感じた。出来れば、この話が県レベルなのか国レベルなのか判断できないが、無駄が出ないように進めていただきたい。

（教育長）

キャリア教育について、今まで長い間わたしたち大人は、とにかく勉強だけ一生懸命しなさい、そうすれば将来選択肢が広がるからという一つの価値観でずっと長い間やってきたが、これから迎える厳しい時代を、子どもたちが乗り越えていくには、ただ勉強していればいいというわけでない。進学指導ではなく人生全体を見通しての進路指導が必要というように、スタンスが大きく変わってきている。

また、今ご意見をいただいたインターンシップのような就業体験だが、確かに夏休みに進学のための勉強もしたい、部活も頑張りたい、またインターンシップのようなものが夏休みに計画されている部分もあるということになると、どれを優先していいのかわからない、というのが実態だと思う。

ただ、学期内に、長期休業中ではない時の就業体験というのが大幅に拡大してきている。それは高校だけに限らず、中学校においても大幅に拡大している。さらに最近では、小学生も体験をしているという状況がある。昔は、学校から外に出ていくということに対して、学校でも、保護者の皆さんでも、外部と接する部分でいろいろなリスクがあるという考え方のほうが強かった。洋服を買うときに試着するのと同じように、人生の職業などはもっと大切なもと考えているので、将来の選択肢を自分の体で感じるという機会をつくっている。

学校によっては、単位がもらえるというところがある。またインターンシップをさらに大きくしたデュアルシステムというものがある。例えば、職業科の高校等に、曜日毎に、この曜日は企業へ行って仕事をしているというところまで進んでいる。キャリア教育にさらに多くの子どもたちが参加できるように、努力していきたい。

（委員）

事務局から新たな課題を説明していただいたが、非常に沢山の課題があるのだと感じた。これらの課題を教育の中で考えていくことの難しさを感じ、改めて人を教育することは、難しい時代になってきていると感じた。

今後は、例えば国際関係の方、自然関係の方など違う分野の方が集まって、提言する機会をつくる必要がある。他の分野の方にも聞いていただくと、いろいろな意見が出てくると思う。ぜひそういう横の連携を取れるようにしてほしい。

また、子どもと大人が一緒に考えていくような場をつくっていただけたらと思う。

（教育長）

横の連携とか、もっと違うアングルからものを見るということも、私は非常に大事だと思う。

多様化という言葉の中で、さまざまな価値観の矛盾が生じてきて、そのしわ寄せが、子どもの所へいくという流れは困ることだ。例えば、少子化問題だが、今からわずか１０年後に県立高校が６校なくなるぐらい人口が減っていく。しかし、日本から外に目を向けると、１分間に１４０人ずつ人口が世界で増えている。１分１４０人というと、一日に計算すると２０万人。これは甲府市の人口と同じぐらい、毎日人口爆発が進んでいることになる。少子化の国がある一方で、人口爆発している世界の地域もある。

そうした中で、子どもたちにいろいろな事を教えていくことは、指導要領で表現さ

れていることだけでは足りず、一筋縄ではいかないことが多い。こういう時代に広い視点、広い角度からものを見ることは大切だと思う。進学や上級学校に行きたいという、上を見ての学校教育、家庭教育だと、大切なものを見失うことになる。もっと水平方向に大きく視野を持っていくことが必要だと思う。木を見て森を見ないような教育行政に陥らないようにしていきたい。

（委員）

今の生徒を見ていて思うのは、自分のことには非常に関心がある。ただ、社会一般のことに対しては、あまり興味を示さない。一昔前は、学生運動などがあって、エネルギーが社会など外へ向ったが、今はそういうことはなく、友達関係や自分のことにしか関心がない。

大人は、職場の人間関係があったり、友達関係もあるし、いろいろな社会、地域もあったり、いろんな関係がある。ところが、子どもたちにとって、自分の社会は家族を除いて友人関係がすべてである。だから、その友人関係がうまくいかなかったときは、行き場がない。いじめや不登校など、すべて友人関係に関わっている。先ほどグローバル化、目を広く向けろとおっしゃっていたが、それは非常に大事なことで、自分を取り巻く環境は、友人関係だけでない。いろいろな社会、人間関係、職業もあるのだから、いろいろことに興味を持たせることが大事だと思う。

先程、横のつながりを持つことが大事だという意見が出たが、このミクロな社会だけでなく、もっと広い、いろいろな世界を知ることができれば、小さな悩みというのは、だんだん無くなってくると思う。

今は、国全体のことを考えさせるということが無いと感じる。国全体のことを考えさせると悪のような、一部ではそういう風潮もあるが、やはり、私は日本人全体にアイデンティティー、主体性がないと思う。子ども達にこれからの日本をどうするのか、どうなっていくのかなど、国全体のことをいろいろ考えさせることが必要だと思う。

（委員）

本日出された答申素案には、いろいろな課題、提言等が幅広く網羅されていて、短期間でまとめられたことは、委員、事務局も含めて大変なご苦労をされたのでは感心した。

先程、数値目標の進捗状況について説明がありましたが、何か事業を推進していくときには、実際に事実関係を確認し、そして目標をしっかり立て、その進捗率等についても、数字を出せるところについては、シビアなかたちで出していくこと、また、成果が上がった部分は、みんなで認め合っていくことが必要だと感じた。

文部科学省が抽出方式で行った全国学力・学習状況調査の結果が新聞紙上に載ったが、この結果については、もっと考えていかなければならないと思う。特に、気になった点として、全国的な課題でもあるようだが、問いに答えない無答率というものがある。それが全国的にも、小学校６年生、あるいは中学３年生に非常に多くなってきていることである。この無答率を、どうやって下げていくか考えていかなければならない。これは、子ども達の勉強に対する意欲の現れでもあるかもしれない。

（委員）

今の子どもたちは、外で遊ぶということが少ないのではないか。外での遊びは危険を伴うから、ということで家の中で遊ばせる保護者も多い。また、外でいろいろな人たちと交流をする子が少なく、家に閉じこもっている子を沢山見かける。

このような状況の中で、子ども達に対して、失敗してでもいろいろなことにチャレンジしていく、子どもたちにいろいろな経験をさせ、失敗をしたらその失敗を活かすことも大事だと教えたい。また、困難にぶつかった時に大人が支えてあげる、経験を話してあげられる、そんな子育てをしていきたいと思う。

（教育長）

先程、指摘があった部分において、子どもたちがグループの縮小をどんどんしていく中で、いかに社会性とかコミュニケーション能力を子どもたちの中に築いていくかという相反する難しさがまたそこにある。例えば学力だけで言うと、「フィンランドのように、フィンランドのように」と、みんなで語っているが、本当にそれでいいのだろうか、フィンランドは、一方で若者の自殺率は世界で最上位のグループにある事実も考えなくてはならない。

また、いじめ、不登校について、数年前は全国の最下位だったが、昨年は、下から４分の１まで順位を上げた。今年は、全国の真ん中に来た。しかし、次は学力が若干低いぞという話がまた出てきてた。また、指摘があった学力の低さよりも意欲の低さという部分、これは考えていかなければいけないことだと思う。

今の子どもたちは、外に出たがらないという話があったが、違ったアングルから申し上げると、子どもたちがつまずかないように転ばないようにというふうに、あらかじめ障害物を取ってやるような部分が多いのかなと思うが、人間というのは、やっぱりエラー、失敗、つまずき、そこから学ぶものが大きい存在なので、家庭でも学校でも、子どもがこけてしまったことに対して、「気を付けろと言ったじゃないか」と怒るよりも、転んだことには関心はない、どういうふうにおまえが立ち上がるかと、それについては大いに関心があるぞ、という姿勢で見ていくような教育ができ上がればいいと思っている。

（委員）

農業に関しては、農業後継者不足、耕作放棄地などいろいろ問題が山積している。また、農業をしている人が大体７０歳前後が中心で、５０代前半の人は非常に少ない。このような農業を取り巻く問題に対して、どう取り組んでいけばいいのだろうか。

食育に関しても、社会全体、家庭全体、家族全体、みんなが考えていかなければならない問題だと思う。。

今は廃品回収が各学校で行われていて、子どもも親も一生懸命に関わっている。親子でこのような環境に対する勉強を一緒にしていくことは、重要なことだと思う。

（委員）

今年の夏の甲子園は、沖縄県代表の興南高校が優勝したが、野球に限らず子ども達にはそれぞれ目標や夢がある、それを支えるのは家族であり、家庭だと思う。

私は、いつも教育長がおっしゃるやまなし教育振興プランが、私たちの指針になっ

ている。「ふるさとを愛し、世界に通じる人づくり」、まさにそのとおりだと思う。

「ファイナルファンタジー」というゲームの BGM などを作った、山梨県出身の清田愛未（きよたまなみ）さんから「山梨には空がある。そして星がある。人がある。そういうような自然をすごく、外へ出て初めてふるさとの大切さが分かる。地域を知ることによって、自分がグローバル化の社会に向かっていることについて分かる」という話を聞いた。そういう意味で、やはり地域にある素材、地域人材を活用すべきではないかと思った。

また、学力に関して秋田県の方と話をする機会があり、どうやって 1 位をキープできるのか聞いたところ、家庭学習が大事だと話していた。

キャリア教育について、キャリア教育アドバイザーが学校に来ても、その学校でどう活かされているのか、わからない部分もある。いろんなプランがあっても具体的な案が出ていない。

茨城県では、県内のすべての小学校４年生を対象に、学びの広場サポートプランという事業を行っていて、夏休みに数日間、学校で算数の学習をさせている。これは、算数が難しくなる小学校４年生の時に、足し算、掛け算、引き算、すべて完ぺきにして、その後の算数のつまづきをなくすことが目的と聞いている。このことを山梨県でも制度化することも必要なのかなと思っている。

私の地域では、小中学校が連携を図っていて、例えば、図工などのものづくりが大好きな小学生だったにもかかわらず、中学校になると違ってくる子がいる。その原因を探るための話し合いもできるようになった。

体力づくりに関して、私もラジオ体操を広める活動を各方面で行っている、文部科学省が「早寝早起き朝ごはん」国民運動の推進をしているので、この国民運動にラジオ体操も併せて行っていただくことがいいと思う。また、ラジオ体操でなくても、持久走や縄跳びなど毎朝継続できるものを広めていきたいと思い、山梨県スポーツ振興審議会で話をしたいと思っている。

（３）　その他

事務局から今後の審議日程について説明し、了承を得た。